

## 《第14回までのあらすじ》

主人公の小宝は、南京の大きな商家に生まれ、1937年の日中戦争開始時は小学4年生。疎開先でも日本軍の攻撃で街は焼かれた。その間の12月、日本軍は南京を占領し、街は焼かれ、老人、婦女子も含む中国人の遺体が各所にほうられ、凍り付いていた。長江を流れる夥しい遺体の数からも、この「南京大虐殺」のすさまじさを物語る。

その後、小宝一家は日本軍支配下の南京に戻った。姉の秀華は、抗日地下組織「救國社」で新聞発行などに活躍していたが、友人の兄の裏切りにより、国民党の地下組織、「三青団」にでつか上げられ、汪精衛の特務に逮捕、投獄された。

父は必死に探して、お金を使って姉を取り戻したが、「わくでなし」と外出禁止を言い渡す父の姿に、小宝は失望した。

日本軍支配下の南京でも、いくつかの闘いが起つた。まず、生活を守るため、2週間のストを決行して勝利した人力車夫の闘い、中央大学の学生たちによる、校長の食費横領、校長退陣を要求する闘い、日本人のアヘン専売権に反対する汪精衛政権も巻き込んで、学生たちのアヘン撲滅運動の成功など。

しかし、日本とその傀儡政府は、それらを黙つて見過すわけにはいかず、小宝が兄さんと親しかった任建や姉の秀華の恋人、袁倫らは、弾圧を避け、新四軍へと参加していった。

\*この連載は、ホーリーページ「時事評論士セイ」欄でご覧いただけます。

小宝たちにも『君たちは若い。もっと本をたくさん読んで、政治のこと

小宝は1940年夏に南京秣寧中学校に入学以後、仲良しの7人で放課後のサッカーに興じていたが、他方、その7人と「友社」を作り、出版物も発行していた。

袁倫と任建が去つてから、彼らは年上の殷成の援助を望んでいたが、殷成は政治への興味を失いつつあった。一つにはある女性との交際にお金を使っていた。もう一つは、小宝の姉、秀華の事件以来、自分も捕えられ、牢に入れられたら、きっと頑張り切れない。また袁倫や任建のように新四軍に参加し、厳しい規律になど耐えられないと思つていた。

「はあまり関わるな。関わっても何の役にもたたない」と呟つた。

小宝たちは、殷成は変わった、アーティになりないと思つた。

秣寧中学の数学教師、于再深は重慶の国民党本部から派遣された地トの南京国民党で、抗日活動をしていた殷成に目をつけ、『君は恐りく愛情の海に落ちたのだね。恋愛なよくて、片方ではやはり國を救わなくては』と葉巧みに国民党に参加させた。

殷成は、『毎月かなりの手当でがもううえぬし、党員を一人拡大すれば、『褒美が出る』と聞いて、心が動いた。だが、何もせずにただ手当だけをかうつてこねむ再び再びに叱られ、数人の名簿を出したが、実は、名前を騙つていた。

高く、学費も高かったので、裕福な家庭やインテリの出身も多かつた。

安徽の大地主の息子、張子広ともう

一人、南京一の茶商人の息子、穆愛

国といふ学生がいた。一人は成績もよく、国民党を信頼し、蒋委员長（蒋介石のこと）を崇拜していた。共産

党が蘇北の農村で地主を肅清したところの噂を聞いて、反感を持ち、人間性に反すると思つていた。彼らは、

地主・資本家と農民・労働者に分かれるのは天地の大義で、変えられないのは管理するのにふさわしい。ある者は一般大衆がふさわしいべ、ある者は一般大衆がふさわしいと思つていた。

中学一、一年の頃は、考え方も小学生たちとそつ変わらなかつたが、学生運動の高揚と第一次大戦の進展につれ、政治的見解には分歧が生まってきた。彼らはお金を自由に使い、秣寧中学校は私学で、南京では質が

毎日茶館に集い、一晩中賭けマージヤンをやり、マッサージに通つたりしていた。

于再深は張子広と穆愛国の二人

を重視し、機が熟した頃を見計りつて、彼らを地下の国民党に参加させた。

この中学では、二つの対立する政治勢力が形成され、多くの学生は、この中間で政治とは無関係な状態にあった。

16 希鷹の歩む道

1943年の夏、一人の青年が上海から南京へ派遣された。彼の名は馬知仁。叔父の援助で、南京市銀行の出納の仕事を得た彼は、ある女子行員の親戚の希鷹（小宝の従兄）と知り合った。小宝ら「華文社」の仲間も加わり、「華文劇団」を作り、馬知仁の演出で演劇に取り組んだりした。「コーコキー」や「ロシア文学、ロシア革命なども紹介した。

父の王奇森は河南の戦闘で日本軍の捕虜となり、投降し、汪政府の南京感化院院長となつた。幼くして母を亡くした希鷹は、温かい家庭、自分を深く愛してくれる父親を望んでいたが、南京に戻つてから官界でぶらぶらと飲み食いし、女性や賭

け事などの道楽をやめ父がイヤで、

自分は生まれ損なつたと思つてい

た。

「う。

また父は、自分が革命の道に進む

ことには賛成しないだろ、彼はか

つて多くの共産党員を殺してこな。

た希鷹は、孫中山先生を国父として

崇拝し、北伐を指導し中国を統一し

た蒋介石も、自分の中では偉大な國

のリーダーだった。「三民主義」の

考えにも賛成。だが抗日戦争は彼の

考えを変えた。南京陥落と日本軍に

よる南京大虐殺は、蒋介石への幻想

を壊した。彼は内戦では英雄かもし

れないが、日本鬼子の侵略に抵抗す

る「救いの星」ではなかつた。

「うして、希鷹は共産党に参加す

る決心をし、承認された。玄武湖は

2000年以前、吳の周瑜が水軍

を訓練した素晴らしい景色の公園

だけだ。特に小宝の姉さんが三青団

に騙されてからは、腐敗した組織だ

と認識した。彼にひつひつ行けば、

中国の明るい未来はあり得ないだ

1冊のノートに『自分の眞の誕生の

日、1945年8月10日』と記した。

『夜が明けた!』

『の年もこの日が、苦しみの連續

## 17 「夜明け」

だった』

『小日本鬼子が失敗した! 本当に晴れ晴れした!』

まだ十代の若者たちは、日本軍とその傀儡の汪精衛政府のもとで、「抗日」のために、ある者は中国国民党の地下組織「三青団」へ、またある者は中国共産党の地下組織へと参加したが、両者の間で議論しつつ、悩むものも多かった。そして彼らはついにその日を迎えた。

1945年8月15日、天皇による日本の無条件降伏の宣言は、全ての中国人に「夜明け」をもたらした。16日の未明、南京の街全体が日を覚ました頃、何千何万の南京人が街頭に出てきた。顔見知りであろうとなかろうと、互いに手を取り合ひ、祝いの言葉を述べ合った。

希鷹と小宝もその人波に入り、歌

つた。通りのどこにも日本人は見当たらず、急いでどこへ行ってしまったかわからない。日本憲兵隊司令部の

前では、兎張りの憲兵は正門の後ろに下がり、手にはまだしつかりと銃が握られ、じつしょいせむないとこう表情で、この狂氣に近い人の群れを見ていた。朝早く、この正門で一人の武官が跪き、東に頭を下げ、彼らの天皇に謝罪し、割腹自殺したといつ。

その夜、希鷹、小宝ら《学文劇団》の友人たちは一堂に会し、一晩中議論した。小宝は『百年来、中国が侵略を受け圧迫された歴史がここで終わる。これから平和な状況で国を建設し、貧しく遅れた国を変えていける。』と語り、希鷹は『誰でもそう願っているが、でも僕は落ち着かない。老蒋（蒋介石）が中国人に平和な生活を楽しむように望むかどうか・・』と言った。別の人人は『日本帝国主義を打倒しなくて

れば、中国人の間に何は解決できない矛盾はなこと思つよ。老蒋も全國民の意志に反するよつたことせやうないだろう。』と言つて、多くの者も彼の見方に賛成した。みんなの心は、勝利後の中国に対する大きな希望に満ち溢れていた。

一方、「三黨団」の若者たちも、蔣委員長についてきたのは正しかつたと、夫子廟の料亭で祝杯を挙げた。

18 日本降伏後の南京

日本の降伏後まもなく、蒋介石は日本人に対し、秩序の維持と国軍（国民党軍）による接收を待つよう命令した。一团を引き連れ飛行機で南京にやってきた中将は、市民の熱烈な歓迎を受けた。全身アメリカン

スタイルの軍服と、アメリカのジープで得意げに南京の大通りを疾駆する姿は、人々には勝利者として誇りしへ、祖国が世界の五大強国の一つになったと感じた。

国民党の調査統計局、スパイ組織（と言われる）が派遣した隊長を探し出し、とうあえず彼の手に金の延べ棒2本を押し込んだ。その人物は素早くそれを受け取った。

接收の将軍や役人たちは飛行機を降りるとすぐ、新街口の「アパート」と洋服屋に向かい、スーツ、革靴、ネクタイなどのおしゃれをした。そして汪傀儡政府機関と日本資本の企業に封鎖の張り紙をした。表に封鎖の印を貼つたら、すぐ裏から荷物を運び出し、空っぽにした。これら的企业は一律に生産を停止したので、多くの労働者が一気に失業した。商人や赦しを求める大小の漢奸は、あらゆる手立てをつくして、重慶から来た役人たちに賄賂を贈り、家や車、中には妾まで提供したりした。希鷹の父、王喬森も《中統》（中

《五子》を奪った。《五子》とは、お金、車、家、女子、証券である。人々が委ねた勝利と国民党への期待は、すぐに泡と消えた。

第一段田の《略奪》は、国民党のいわゆる法定の通貨と、汪傀儡政府の通貨との交換比率を1対200としたため、被占領区の人々の財産は一時に半分に減られ、商人たちの売り惜しみなどで、物価はその後何倍、何十倍となり、やって来た役人たちは、急に富裕層となつた。南京の人々は、『何が国民党か—国民党から搾り取る党だ!』と陰で言つ合つた。

当時、新四軍は8年間の抗戦中ずっと、江蘇地域でゲリラ戦をやっていた。南京に入城し、日本軍の投降を受け入れようとしたが、まだ大都市を管理した経験のない中共（中国共産党）中央は、その条件は熟していないと考へ、実行しなかつた。

一方、小宝や希鷹らの中学生では、国民党は学校内に正式に党支部の看板を掲げ、子再深校長も三青団の

1月2日、正式に日本降伏の儀式を行つた。平和を願う国内世論や米ソの動きもあり、国民党と共産党は話し合いを始め、10月10日の「双十協定」が公表され、政治協商会議の開催が約束された。

ために事務所を都合した。また校長の提案で行われた学生自治会の選挙では、二三団の代表は支持されず、多くの進歩的學生が選ばれた。

學生たちの壁新聞はこれらのこと

件や内戦の一コースを伝へ、高二のクラスの毎週一回の演説会でも、ある學生が涙を流して内戦反対を訴えた。しかし、二三団の學生は、それは共産黨の諭諭であると反諭した。

国民党宣伝部は校長を訪ね、『一部の人たちは民主的雰囲気を利用し、人心を惑わす出版物を刊行しているが、君たちの任務は、学校内で共産党と左派勢力の動向に注意対的な指導を信じるよう教育する』ことである。『我が國がアメリカ式の民主を実行するのは、正面に叫う

と、幻想である。葵城校長は、戦後の有利な条件を利用して、徹底的に共産党を撲滅せんとした決心した。他のひとせつの後の「いじだ。」と叫つた。

校長はぺこぺこ頭を下げ、その後、《中統》の中心の教師の会議を開いた。彼らは次々に、『學生の間の風向させ懸べ、共産黨の活動が激しい』

『壇』の《友社》組織とのボスの林家宝が問題である』『いつにとを聞く良い學生もいるので、我が組織に入れて、あの組織の内部に派遣しそう』などと話した。

宋玉美といふ女學生は、壁新聞を読むのが好きで、特に小宝の「好朋友」に興味をもつていた。説得力があり、文芸面も優れていた感じ、自分も投稿し、注目をひいていた。

あの日彼女は、校長の指示を受け

た教務主任から、秘密組織への参加と、学生たちの動向を報告するようになると誘われた。『よべ~~お~~めお』と答えた彼女は、小宝に報告し、自分がおとなしく~~お~~たこと、懶氣を出して鬱い、そういう人物とみなされてはならないと思った。

(つづく)